教授の呟き

第40回

産学連携に思う大学の役割

東京海洋大学教授　苦瀬博仁

30年たてば、価値観は逆転

今から30年以上前の大学入学時には、全共闘運動で半年以上、授業が休止。何も分からないまま「大学とは何か」を考えさせられていた。しかし「産学協同絶対反対」というスローガンを目にし「理工学部で勉強しても、産業界の役に立ってはいけないのかなぁ」と思った途端に、堂々としたノンポリ（政治的活動に無関心なこと）に変身していた。

最近の市場経済化、規制緩和、民営化などの改革の波は大学にも及んで、国立大学も法人化された。「産業界にすぐに役立つ人材」「学内ベンチャー」「競争的研究資金の導入」など。金銭に結びつかない研究は不要であるかのような風潮さえ生まれるようになった。

まさに隔世の感である。進歩のための競争は必要と思うし、30年もたてば価値観が逆になることもある。とはいえ、振れ幅が大きすぎるような気がしてならないし、その分だけ生来のへそ曲がりが頭をもたげてくる。

コスト意識に不慣れな大学人

極端に言えば「世俗を絶ち、学問を究めたい」と純粋に願う研究者が、不慣れな市場経済の波にほんろうされてしまうことは多い。たとえ産業界に適応できる素地を持つ人であっても、長年大学にいれば潜在能力がさびついてしまうこともある。[1]

それでも社会への貢献を目指して、産学連携を試みたとしよう。しかし研究面での産業界と大学の意識のズレは確実に存在するし、このズレは産学連携のときにこそ顕著に表れる。

例えば、産業界は短期間のうちに実現可能性の高いビジネスモデルを求める。ところが大学は、長期的な視野で、学問的な価値を追求しがちである。知らぬまに意思の疎通を欠くことは、しばしば起きてしまう（表参照）。[2]

また大学人は、一般にコスト意識や費用の見積もりには慣れていない。高く見積もれば、連携企業から「お高くとまっている」「社会貢献の意識がない」となる。安ければ、シンクタンクやコンサルタントから「民業

表　ロジスティクス研究でのトレードオフ

	産業界の期待（実践）		大学の期待（理論）
①	ビジネスモデルの構築（ビジネスとしての成果）	VS	学問的な発見（学術論文としての成果）
②	実現可能性の重視（採算性と効率性の追求）		学問的価値の重視（学問的貢献の追求）
③	短期的目標（すぐに役立つこと）		長期的目標（すぐには役立たないこと）

圧迫」「安売りのコンサルタント」と非難されかねない。

そこで各大学では、産学連携センターなどを通じて円滑な運営を試みており、軌道に乗りつつある。

成果主義のつまずき

最近、外国での研究成果のねつ造疑惑や、国内での不正論文疑惑が話題となったが、成果主義のプレッシャーもあったのだろう。これほどのことではなくても、研究に先立つ仮定を見落として結論を誤ったり、社会現象とかけ離れた結論を導いてしまうこともありそうだ。背景には、成果至上主義や研究者の教育不足とともに、解析技術の進歩により枝葉末節に目が奪われがちな傾向もありそうだ。(3)

ロジスティクスの分野に当てはめてみよう。コスト最小化や最適化を目指して研究開発をするときに、分析に先立つ仮定を正確に設定しているか否か。その結果の適用範囲を明示できるか否か。企業や社会で実務に適用した場合に起こり得る負の影響を想像できるか否か、などが直ちに思い浮かぶ。

社会に貢献する研究

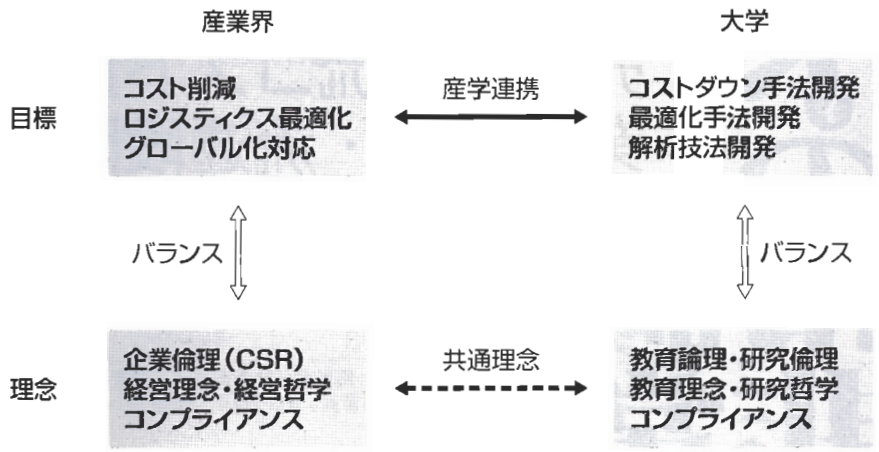
「ソーシャル・ロジスティクス」という言葉が使われだしたのは、今から10年近く前の日本物流学会全国大会だった。市場原理を超えた役割の存在を意識したその時期は「社会的責任（ＣＳＲ）」「法令順守（コンプライアンス）」が言われ始める少し前でもあった。今では、環境問題やセキュリティーなどを含めて、幅広く安心・安全な社会実現のための「企業の社会的な責任と貢献」が期待されている（図参照）。

こうして企業倫理や経営哲学の重要性が認識されればされるほど、企業でも市場原理以外の規範が求められている。大学でも、市場原理やコスト論だけでなく、倫理学や哲学などの幅広い教養を含む教育研究の基盤づくりが期待されていい。

今度は約30年前と正反対に「少しは市場原理とは別の純粋さも必要ではないか」「ＩＴ（情報技術）やグローバル化の時代だからこそ、逆に腰を据えた教育研究が大学の役割なのではないか」と思うようになった。

「市場原理とは別の産学連携があってもいいはず」と、感じることも多いのである。

図　産学連携の目標と共通理念



（1）苦瀬博仁：「話して、書いて、振る舞うこと」教授の呟き、第32回、流通設計21、2005年８月
（2）苦瀬博仁：「刷り込み現象は、払拭できるか」教授の呟き、第16回、流通設計21、2004年４月
（3）青野由利：「不正の痛み」、毎日新聞、発信箱、2006年２月５日朝刊

Profile
東京海洋大学　海洋工学部
流通情報工学科　教授
苦瀬博仁

（くせ　ひろひと）1951年東京生まれ。73年早稲田大学理工学部土木工学科卒業。75年、同大学大学院修士課程修了。81年、同大学大学院博士課程修了後、日本国土開発に入社。86年から東京商船大学助教授、94年より同大学教授。2003年大学統合により、東京海洋大学教授。副学部長、評議員を経て、06年4月より流通情報工学科長。94年から95年の１年間、フィリピン大学客員教授。04年６月より東京大学大学院医学系研究科客員教授（併任）。主な著書に「付加価値創造のロジスティクス」（税務経理協会）、「都市交通一都市交通計画・都市物流計画」（丸善）、「マニラ・エンジョイ・トラブル」（論創社）、「明日の都市交通政策」（成文堂）http://www.e.kaiyodai.ac.jp/~kuse/